

## 社会運動の継続とその要因

上関原発建設に反対する祝島島民の事例から

社会システム研究科  
地域コミュニティ専攻  
2012M30003  
柴 奈保子

### 要旨

本論文では、社会運動の継続性とその要因について明らかにすることを目的としている。山口県熊毛郡上関町祝島は、周囲およそ 12 キロ、現在 450 人ほどの人々が生活する、小さな島である。上関町に原発の建設計画が露呈したのは 1982 年のことであり、その立地点は、祝島からおよそ 4 キロという、まさに目と鼻の先であった。祝島では、島民の 9 割が反対の意志を示し、計画浮上当時から現在に至るまでじつに 30 年以上にもわたって、原発反対運動が続けられている。祝島の原発反対運動を新しい社会運動として位置づけ、島民への聞き取り調査の結果を用いて、運動の継続の要因について分析を行った。調査対象である祝島の島民の間には、物質的利害よりも重視されている独自の価値観が共有されていることが反対運動継続の要因であると仮定した。

「新しい社会運動」とは、1960 年代以降に先進産業社会で顕在化してきた、環境・エコロジー運動、女性運動、平和運動などの性格を、在来型の労働運動との対比でとらえ、トゥレーヌやオッフエ、メルッチらが規定した概念である。その特徴は、古いタイプの労働運動に見られたような、物質的利害をめぐって展開されるという性格は持ち合わせていない点にある。むしろ、金銭では得ることのできない、アイデンティティや人間としての尊厳を守ることが志向されるものである。新しい社会運動は、成果を追求し合理性に重きを置く「システム」という敵手によって、自分たちの生活理論をコントロールされる危機に直面した人々が、アイデンティティや人間としての尊厳を守るために集合行為に臨むことであるといえる。

日本における原発反対運動は、東日本大震災以前までは、全国的な広がりほとんど見られず、主に立地点の住民が担う運動により、建設計画の撤回という運動目標が達成されてきた。こうした立地点住民の反対運動は、地元の産業に従事する保守層の呼びかけで動員力が生まれ、ローカルに徹した運動が展開されるという特徴をもつ。祝島の場合は、状況に応じて島外の支援者との共闘が可能であった点も、彼らの運動の継続に大きく関わっている。

祝島の人々の生活は、常に自然とともにあり、かつ、密接な人間関係を基盤として成り立っている。祝島では、昔から人々が相互に助け合い、支え合って生きてきた独自の伝統

が今も息づいており、こうした伝統が、到底物質的な利害とは代え難いものであるということ、島の人々は実感として理解している。祝島の人々による原発反対運動は、こうした伝統に依拠していると考えられる。

上関町に原発の建設計画が浮上した当時、島の人々は原発についての知識がない状態であった。しかし、島には原発での労働を経験した人や、被爆者の人々がおり、彼らが反対運動を牽引していくことになる。また、元より上関町は保守的な性質が強く、人々は有力者に従う、という構図が当然のものになっていた。しかし、物質的利害が手に入ることを強調し原発を推進する有力者に対し、物質的利害よりも、伝統的な人間関係を基盤とした島の生活に価値を置いていた人々の間に、自分たちの生き方は自分たちで選び取っていかなければならないという意識が芽生えた。祝島の島民として、島のあり方や自分たちの生き方は自分たちの手で決めていくこと、すなわち、アイデンティティと島で生きる人々の尊厳を守るため、彼らは運動をしていると考える。

祝島の人々が原発反対運動に取り組むうえで、運動のノウハウを知る活動家の存在も重要であった。島の人々は次第に運動の技術を身に付けていき、状況に応じて自分たちのできる方策を模索してきた。原発がなくても生活していけることを証明するために、特産品の開発など、島おこしとなる活動にも注力し、こうした取り組みに積極的に関わり、協力し合うことで、島の人々のアイデンティティや連帯はより強まった。

島の人々も認識しているように、1982年から毎週一度行われている祝島の島内デモは、抗議行動の一形態としてのデモではなく、島民同士の意識を確認し合う場であり、連帯を強化する、という役割を果たしている。島内デモによって、彼らのアイデンティティや連帯は可視化される。こうした機能をもつデモを継続して行ってきたことが、運動そのものの継続に結びついている。

また、田名埠頭や田ノ浦などでの直接阻止行動という厳しい局面においても、島の仲間やカヤック隊のメンバーと寝食をともにしながら密な交流を行い、その交流の中に、楽しみを見出す。こうした楽しみがあったからこそ運動を続けることができた。さらに、活発な交流を通してカヤック隊など島外の支援者との新たな連帯も生まれ、阻止行動の継続につながる体制が整った。

また、ここ数年のうちにIターン者も増え、原発反対運動だけでなく、島での生活そのものにおいて、さらに、身体的な面と精神的な面の両面においても、彼らの存在は大きなものになっている。ここに、祝島における新たな共同体形成の可能性を見出せると考えた。

祝島の人々の、アイデンティティと尊厳をかけた運動は、今後どのような展開をみせるかは明確に結論づけることはできないが、彼らの生き方に共鳴した人々が、自らもアイデンティティを求めて島を訪れ、より大きな共同体が生まれ、運動も継続していくかもしれない。そうした人々の動向にも注目していきたい。